

美術手帖

BT | 2019.12

vol.71 NO.1079

Artist Interview

宮永愛子

小林エリカ

アート&デザイン

学校ガイド

「移民」の美術

現代日本の「移民」フォトレポート

在日コリアンと美術

南米・北米の日系移民のアート

あいちトリエンナーレから考える「移民」

アーティストが向き合う難民問題

李晶玉 / 神里雄大 / 岩根愛 / なみちえ / ヒワ・K

高山明 × 田中功起 / 菊地成孔 × 磯部涼 × ハン・トンヒョン



子がつくった娘のアルバム 2019

目に見えないものたちを探して

小林エリカ

作家・マンガ家として、目には見えないものへの想像力と、
入念なリサーチにもとづいた複層的な作品を発表してきた小林エリカ。
史実とフィクションを織り交ぜ、時空を自在に行き来する物語は、
押さえ込まれていた世界の様々な記憶を揺り起こす。
本特集では、小林による最新書き下ろし短編小説と、韓国文学と現代詩、
それぞれの第一線を担うふたり、キム・スムと最果タヒとの対談を収録。
語られなかった声に耳をすませ、物語を編み続ける小林の作品世界に迫る。

一〇〇年のココ 小林エリカ

子というのが彼女の名前だった。
ただ二文字、子。

大概は誤字か脱字を疑われた。

満月の晩、隣村から十六歳で結婚してこの家へやってきたヨキから産まれた、二番目の娘。その祖母がコンという名だったそうで、その二文字を取ってコと名付けられた。子。

子は、子という名前が大嫌いだっただ。

実際、何かが欠けているような気すらした。コでは呼びづら
いからと、ココと呼ばれることもしばしばだった。

ココ三つ切れ三銭五厘。

この新潟県の雪深い小さな村では、ココ・シヤネルなどという人物を誰一人知る由もなく、ココといえは汎庵なのであった。

姉の名前は操と聞いた。

その名はミサオと三文字もあったが、右目がなかった。

赤ん坊のときに切った爪が目に入ったからとか、縁側から落ちて頭を打ったからとか、脳炎をやったからとか、理由は様々言い伝えられていたものの、誰も本当のことは知らなかった。

ただその右目は白濁し、瞳は落ち窪んでいた。

いずれにしても、母は子に操の面影をよく見るようにと言いつけさせた。子はその母の言いつけを、生涯守りとおした。

おまんだのあねちや片目めいないないさけ。子の耳にそれは新潟の言葉で囁かれたが、子がそれを語る時にはいつも東京の言葉に変換された。あんだの姉さんは片目が見えなくて可哀想な子なんだから。

小学校からの帰り道、操が落とし穴に落つことされたことがあった。

男子たちが「盲！」とからかっていた。

子は操を穴から引き摺り出しながら、怒りに震えた。

姉をからかい笑った男子ひとりひとりの顔と名前をはつきり記憶し、死ねばいい、と心底呪った。

事実、後にその男子たちはひとり残らず徴兵されて、戦争で死んだのだった。

けれど子は、彼らが死んだ後も、決して彼らを忘れなかったし、許そうとはしなかった。

子は繰り返して続けた。さまざま。



子が東京へ出たのは十六歳のときのことだった。未だ子はココ・シャネルの名すら知らなかったが、銀座のデパートの針子になった。

裁縫が得意だったのだ。はじめて買った給料で、操のためにガラスの義眼を買ってやった。

次に買った給料で、操を東京へ呼び出し、その右目に義眼を嵌めさせ、綺麗な着物を着せ、写真館で見合い用の写真を撮影させた。

操がその義眼を嵌めたのは、ただその一度きりだった。

操は目に何かを入れたり出したりするなんて面倒だ、と義眼を箆筒の奥に仕舞い込んだ。

勿論、操は見合いなんてもつと面倒だと考えた。

子は酷く憤慨したが、操はそんなことに少しも構わなかった。

ずっと後に操はスキー場で出会った男と駆け落ちまでして、結婚をすることになる。

子はひとり東京で懸命に働いた。

針子たちは、子の新潟の言葉をかからなかった。子は「え」と「い」を使い分けることができなかったから。

子は必死に東京の言葉覚え、日に何度も顔を洗った。東京の水で顔を洗えば、東京の顔になると言われたから。

けれど最後には、子はデパートを逃げ出した。

子はココ・シャネルのようにその仕事で名を成すこともない。子は帰らなかった。

母や操たちのいる、あの小さな村へ。

庭には村で一番大きな杉の木が聳え、大きな墓石の下には先祖代々が眠る、茅葺屋根の、あの家へ。

子が子だった、あの頃へ。

しかし子には、どこにも帰る先などなかった。

二番目に生まれた娘など、村にも、家にも、必要とされていなかった。

結局、親戚の計らいにより、新宿で住み込み家政婦の仕事をするようになる。

角管にあるホレンガ造りのモダンな建物へ案内された。

そこは精華高等女学校と呼ばれる女学校だった。

校長室へ案内され、元士族、明治維新史の研究者である校長

勝田孫弥と、女学校講師として働く娘たち、道と哲子を紹介された。

その姿に、子は目を眩した。

姉の道は華やかな着物姿で、妹の哲子はワンピースにハイヒールを履いていた。

子にとって、道と哲子は別世界の人だった。

ローラは、深く積もった雪の中に、足をつつ込んだりしながら、もがくように歩いているうちに、突然大きな声で笑い出した。

「あーあ！ わたし、とうとうここまで来ちゃった。前へ進むのは、恐いけど、後ろになんて、戻れるもんか。」

——『この楽しい日々』

子が結婚したのは、二十四歳のときのことであった。

結婚相手は和菓子職人だった。

道と哲子からは、大きな引き出しのついた鏡台が結婚祝いに贈られた。小さな畳敷きの新居には不釣り合いなほど大きく豪奢なものだった。

夫は銀座の菓子屋で働いていたが、戦争が進むにつれて砂糖が手に入らなくなり、ビルの管理をする会社に転職した。

子にとっては、夫が菓子職人だろうとビルの管理人だろうと、一向に構わなかった。

ただ一刻も早く子が欲しかった。

自分の名前がそとでも、子なのだから。

いつかその胸に、子を抱く日を夢に見た。

三人の弟たちがみんな出征していった。

田舎へ戻って日の丸の旗を掲げて、操と並んで写真を撮った。

道がデパートで着物を買う時には、その場で色違いもみんな買ってしまう。他の人が自分と同じ着物を着ているなんてお洒落な道は許せなかったから。

哲子はアメリカの大学帰りで、英語を喋った。しかも、ボーイフレンドがいた。そのボーイフレンドときたら、清という名ではあったがその背は高く目は青かった（父親がイギリス人だったのだ）。

道と哲子にとつても、子は別世界の人だっただろう。

けれど子は、気が利いたし、よく働いたし、裁縫も得意だった。時々、学校の授業の手伝いもした。

だから道と哲子は、子に見合いの話が来た時、泣いて懇願したほどだった。

どうか、ここにすつといて欲しい。

結局、子は結婚して仕事を辞めたが、その縁だけは生涯途切れることなく続いた。

後に、道は勝田孫弥のあとを継いで精華学園校長になり、哲子はローラインガルス・ウィルダールの『この楽しい日々』『大草原の小さな家』などテレビドラマ『大草原の小さな家』の原作にもなった一連の作品の翻訳を手がけることになる。

子は哲子からその訳書を買って受け、テレビの脇に大切に置き続けた。しかし小学校しか出ていない子は、読み書きもおぼつかず、それを読めはしなかったのだけれど。

わたしのところへわたしの子だという人が、やってくるんです。

けれど、わたし、本当に、子どもを産んだんでしょうか。それがどうしても、思い出せません。

子の両手はベッドにベルトで縛り付けられていて、点滴の跡が紫色の痣になっていた。子は、点滴をしていることもすぐに忘れて、その針を何度も引き抜いてしまっていた。

もう、子が子だった頃のことを語ることもなくなっていた。けれどそれから、子はずっと生き続けた。

病院の白いベッドの上で。

両目を見開き、虚空を見つめたまま。

私は次第に面倒がって見舞い、へもあまり出かなくなつた。

そうして子が死んだのは、九十四歳のときのことだった。

操はそれよりも七年前に死んで、子が、子はその葬式へ出ることもなかった。

ところであのガラスの義眼は、いったいどこへ行ってしまったのだろう。

いま、私は二歳になる娘と並んで眠りながら、時々、子を想う。

血の繋がっていない、私の祖母、子のこと。

もしも子が生きていたら、ちょうど二〇〇歳だったのだと、

ふと気づく。

もっと色々聞いておくべきだったと考えるけれど、もう遅い。

娘が大の字になって、小さな寝息を立てている。

その耳元で、私はココの、子の物語を、話しはじめる。



Profile
こはやしえりか 作家、マンガ家、1978年東京都生まれ、2014年に小説『マダム・キョリーと明夜を』(集英社)で第27回二島由紀夫賞、第151回芥川賞、之介賞ノミネート。その他の著書に小説『観望』(新潮)、『たろ』(角川)、『アトモア』(角川)、『マダム・ガウの子ども』(角川)、『トルモア』(2012)、『2019』(作品室)、『忘れられない』(角川)、『2013』などがある。主な展覧会に、2016年『六本木クロッシング2016』(個展)、『あなただけの』(美術展)、『19年』(現代美術)、『現代美術に読む文字』(国立新美術館)、『東京二島由紀夫賞』(The Art of BOJ)、『Famulo Koro Fomulo』(角川)、『新刊小説』、『トリニエ』、『トリニエ』、『トリニエ』(集英社)が刊行中。



夫は軍需火薬工場へ徴兵された。その火薬の粉塵のせいで、後に肺炎を患い死ぬことになる。

弟たちは三人ともシベリア送りにはなったが、死にはしなかった。

家も焼けずにすんだ。

戦争が終わった。

しかし子には子ができなかった。

子はそこで養子を買って受けることにした。

養子として子のもとへやってきたのは、黒く太い肩をした娘だった。

それが私の母になる。

つまり、子は私の祖母である。

子はもはや子ではなくなり、母になり、祖母になっていた。

子が幼い私を布団に寝かしつけながら、その耳元で話して聞かせたのが、この物語である。

子は、夫が死んだ後、その遺族年金ではじめての海外旅行へ出かけていった。

ハワイも、上海も、ロンドンも、カイロも、ニューヨークへもツアーで行った。

パリの免税ショップで、ココ・シャネルの小さな香水瓶を買った。子はそれを、鏡台の引き出しの中へ仕舞った。

ココはいまや沢庵などではなかった。よい匂いにする香水だった。

子の髪には白いものが混じり、パーマをあてた短い髪には白いネットを被るようになった。

大きな胸はすっかり垂れた。

そうして八十五歳を過ぎた頃から、いろいろなことを忘れはじめた。

まずは、銀行通帳がなくなった。それから、判子が。ハンド

バッグが。家の鍵が。

記憶もひとつ、またひとつ、と失われてゆく。

あれほど得意だった裁縫も、料理さえできなくなって、スーパーマーケットで売られている菓子パンばかりを食べるようになった。

テレビはただの黒々とした塊になった。どのみち『大草原の小さな家』の放映も、とっくのまえに終了していたのだけだ。テレビの脇に、本だけが立てかけられていた。

子はそれからほどなくして、老人福祉施設へ入居することになった。

それから最後には多発性の脳梗塞をやって病院へ入れられた。病院へ入る頃には、もう子は大方のことを、忘れてしまっていた。

子は見舞いに訪れた私に向かって真顔で尋ねた。



小林エリカ × キム・スム



ソウルの韓国文学翻訳院にて、左がキム・スム、右が小林エリカ Photo by Minji Yi

Cross Talk 1

語りえなかった 声を解き放つ

韓国でもっとも権威ある文学賞、李箱文学賞受賞作家のキム・スムが手がけた長編小説『ひとり』は、日本軍「慰安婦」被害者の300もの証言記録をもとに構成されたフィクションだ。今回、対談が叶い、小林はソウルを訪れた。小林はソウルを訪れた。同じようにフィクションとドキュメンタリーの要素を小説で扱ってきたふたりが、歴史を扱うこと、ひとりの人生と向き合うことについて、意見を交わす。

証言を「物語」に取り入れる

小林 『ひとり』を読ませていただいて、圧倒されました。政治的に日韓関係の緊張が高まっているなかでこうしてここでお会いでき、お話を聞けることがとても嬉しいです。
キム 私も小林さんの作品を読ませていただきました。多方面にわたる才能をお持ちで、表現方法は私より幅広いですが関心事は似ていると思います。記憶そして女性たちの物語を歴史的に解き明かそうとする試みをされていると感じました。
小林 私もドキュメンタリー的手法で、歴史的事実を詳細にリサーチして物語を立ち上げるといっていますが、キム・スムさんの作品に出会って「こんなやり方もあったんだ」と感動しました。また、記録を物語のなかに入れ込んで、その向こう側に広がる語りえなかったことや語られなかった人の存在までを描き出す作品を書くこと

は、私がやりたいと願っていることでもあります。

キム 『ひとり』を出版してから、政治的な文章を書くことについて質問されることがあります。ただ、私は一度も政治的な作品を書こうと思ったことはありません。「ひとり」の主人公は広大な海に浮かぶ孤島のようには寂しい人生を送ったのですが、その暮らしを見つめて小説を書きたかったのです。「慰安婦」について書くにあたり注意したのは、彼女たちの証言を誇張してはいかないということ、そして選ぶ単語や文章によって、またご存命の被害者の尊厳を再び傷つけてはならないということです。小説ではあるけれども虚構ではないことをどう読者に伝えるか考えた結果、証言を小説に取り入れる形式を取ることにしました。
小林 歴史というどうしようも過去の話だととらえられがちですが、物語をたちあげる手法によって、戦争は少しも終わっていないことがよくわかります。また、証言を

編み上げていくことで、大文字で語られる「歴史」ではなく、ひとりの人生の生きたまが触覚や嗅覚、痛みを伴って感じられるのはすこいことだと思います。

私も戦争や「放射能」の歴史をモチーフに小説を書いていると、すぐに政治的なことに絡めとられてしまうことがあります。いっぽうで、難しいとか、わからないといつてみんなが口を閉ざしてしまう場合も多いんです。でも、そこで政治的であったり専門的で難解な議論だけに走るのではなく、文学作品を通して一人ひとりの人生からあらゆる「歴史」を見つめ直すことに可能性があるのではないかと信じています。
キム 国立新美術館で開催された「話しているのは誰? 現代美術に潜む文学」展の小林さんの小説「彼女たちは待っていた」では、「戦争が終わる／彼女たちの人生は終わらない」という文章がいちばん印象的でした。
小林 私の父は戦争中に学徒動員された16

キム・スムさんの作品は、証言を編み上げることで、大文字で語られる「歴史」ではなく、ひとりの人間の生きたまが触覚や嗅覚、痛みを伴って感じられる——小林

戦争はいつでも起こりうるし、同じことがどこかで起こって被害者が生まれている、現在進行形の話だと伝えたかった——キム・スム

歳の少年でした。大日本帝国の陸軍医の息子だった父の日記をモチーフに作品をつくったことがあるのですが、かつて軍国主義に傾倒していたことを父の口からは一度も聞いたことがありませんでした。残された父の日記を見て、どんなに親しくとも人には語りえないことがあり、どうすれば相手を傷つけずにそれを知ることができるかを考えてきました。愛する父が少年だったとはいえ大日本帝国の側に荷担した過去もあるという複雑な気持ちを抱きながら、その折り合いをどうつければいいのかをいまでもずっと考えています。

キム 私は小林さんのお父さんも被害者だと思います。カズオ・イシグロの作品が好きなのですが同じように内面につらいものを抱えた登場人物が描かれています。彼らもトラウマを一生抱えて生きた人たちで、結局は帝国主義の被害者たちでした。加害者側に属しているために、日記でしか記録できない、不幸な立場にある人たちが

のです。小林さんはお父さんのことを理解して後世に伝える作業と、加害者として「慰安婦」などの被害者のことを知っていく作業を同時にされているのではないのでしょうか。そういう意味では私よりも辛い作業ではないかと思いますが、日本人の「慰安婦」被害者も受けましたし、日本人の「慰安婦」被害者も受けました。成瀬巳喜男の映画『浮雲』などを見ると、当時の女性の人生も非常に苦しいものだったということがわかります。

小林 私は最近そのような女性の気持ちに関心があります。「慰安婦」の女性が大きな目に遭っているというふうで、男性たちを支え戦場に送り出す女性たちがいるというのとは違うことなのか。今後も戦争を起こさないうようにするために、そういう女性の気持ちも解き明かさなければわからないのではないかとも思っています。例えば核の問題についても、じつは第二次世界大戦中に日本も原爆を開発し、それをサイパンに落とそうとしていたという歴史的事実があ

くかというのが私の最近のテーマになっています。女性は男性に比べると弱い立場にあると思いますが、そのなかで少しでも生き延びたいと思っているうちに、知らず知らず加害者側に加担しているかもしれないという恐怖をつねに感じているのです。

歴史的事実を書くということ

キム 核の歴史や光についても関心をお持ちのようですが、科学的な知識はどのように勉強されたのですか？

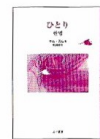
小林 よく東京電力福島第一原発事故の後に関心を持つようになったのか聞かれますが、それ以前から核のことや原子爆弾に関心があり、目に見えないものを紙の上に書きとめたいと思ってこの20年ほどリサーチをしてきました。キムさんも「慰安婦」をテーマにした作品のほかに、1987年の民主化運動をモチーフにした作品を書かれています。どのようにリサーチされたの

ですか？

キム 民主化を求めるデモで催涙弾を頭に受けてなくなった大学生の李韓烈さんをモデルにした『Lの運動靴』(原題)という作品は、彼がなくなったときに履いていたスニーカーを修復し、元通りに復元する過程を描いた物語です。それは記憶を通じて死者を復元する過程でもあり、小説を書くために彼のことを記憶している人々から話を聞きました。また、李さんのお姉さんと、当時一緒に学生運動をしていた仲間の方々は、本が出る前に原稿をお見せしました。「ひとり」の場合は、執筆中は元「慰安婦」の方にはお会いしませんでした。お会いする勇氣もなかったですし、誰かひとりに会ってしまおうと自分の経験や記憶にとらわれてしまうのではないかと思ひ、証言だけをもとに小説を書きました。「慰安婦」被害者を長年支援してきた方々が、小説の内容が誇張されているのではないかと不安でした。その後、被害者の方々が暮ら

少しでも生き延びたいと思っているうちに、知らず知らず加害者側に加担しているかもしれないという恐怖をつねに感じている——小林

ります。人々がそれを「神風」のように待ち望んでいたということを知ったときに恐ろしくなりました。もちろん被害者のディテールを知ることが第一ですが、加害者側についてしまう弱さみたいなものをどう描



キム・スム 『ひとり』 (岡裕美訳、三一書房、2018)

「慰安婦」が最後の「ひとり」になった近未来を舞台にした物語。加害・被害、男性・女性を越え、暴力的な歴史の渦のなかでひとり一人の間引き受けねばならなかった苦痛を描く。



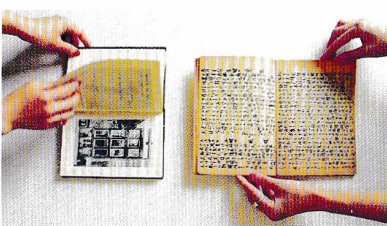
キム・スム 『Lの運動靴』 (民音社、2016、未邦訳)

1987年に韓国で起こった「6月民主抗争」の爆火點となったのは、青年李韓烈(リ)の死であった。後が隔っていたスニーカーが復元され、歴史的価値を付与される過程を描いた長編小説。



小林エリカ 『親愛なるキティーたちへ』 (リトルモア、2011)

ユダヤ人の少女、アンネ・フランク13歳、小林エリカの父、小林司16歳。戦争という同時代を生きた2人の日記に書かれ、ドイツ、ポーランド、オランダをめぐった小林の旅の日記。



小林エリカ Your Dear Kitty, 2 Diaries 2011 アンネ・フランクの日記(1942-44) 父の日記(1945-46) ヴィデオ © Erika Kobayashi Courtesy of Yutaka Kitakake Gallery

している施設、ナムムの家に招待され、支援活動をされている方からお礼を言われて安堵しました。「ひとり」という小説がハルモニおばあさんたちとの縁をつないでくれ、私の作家としての視野を広げてくれたと感えています。

小林 自分が生きていない時代のこと、戦争のことやいまも生きている人がいることについて書くのは勇気がいらしますが、その時代を生きていないからこそ見えてくる距離を感じたことはありますか？

キム 勇気も必要ですが、私たちの世代は戦争や絶対的な飢えを経験していないので、想像することが難しいというところはありますね。

小林 それでも書かなければならないと感じたきっかけはありますか？

キム 「慰安婦」については、許しを受けなければ書けないと思う、という話を読者や記者に対して何度かしたことがあります。いつもはインスピレーションが降りてくれば書けるのですが、「ひとり」は書きたいという欲望だけでは書けない、許しを受けることとある種の姿勢が求められる小説でした。現在存命されている「慰安婦」被害者は

20人、平均年齢は91歳です。ある年にはとても多くの方がお亡くなりになりました。訃報に接して、「いつかは最後のひとりになる」と思ったときに「ひとり」というタイトルが降りてきて、そのときに書くことを許されたという気がしました。私の使命は文章を書くこと、小説を書くことで、自分が書きたいこと、書けることを書くことと考えて作家活動をしています。

「語りえなかつた声」に耳をすませて

小林 「ひとり」を読んでいると、証言を編み上げるのが作家としてその背後に膨大に存在するであろう「語りえなかつた声」に耳をすませて書いていらつしやるのが伝わってきいて、本当に素晴らしいお仕事だと思えました。さらに、後半にアフリカで性暴力被害を受けた女性の話が出てきますが、「慰安婦」について突き詰めれば現在を生きる女性たちの問題であり、同じような構造がいつも続いているというのを考えさせられます。また、それが語られず、書きとめられることもないまま過ぎてしまうかもしれない現在の問題が、もつとあるのでは

はないかと気付かされました。

キム 私も日本と韓国だけの問題に限らないと思っていますし、さらに言えば女性だけに限らず人間についての問題だと思っています。いまも戦争が起こっている場所があり、性暴力被害者が私たちの近くにあります。戦争はいつでも起こりうるし、同じことがどこかで起こって被害者が生まれている、現在進行形の話だと伝えたかったのです。「慰安婦」被害者の方々は、自分の経験を話すために記憶をたどるとき、日本が悪いと言われるわけはありません。自分を助けてくれようとした日本人について話されることもあります。日本や日本人が悪いという話ではなく、結局は戦争の問題だと自覚されているのだと思います。

小林 「慰安婦」被害者を、それぞれのディテールやこれまで生きてきた複雑な時間を無視して「被害者」にまとめてしまうのではなく、それを解きほぐしてひとりの人間として向き合ふことが重要で、それが可能なのが文学作品の強みだと思います。日本で「慰安婦」に対して否定的に言う人は、一人ひとりの人生にある感情や痛みを想像できていないことで距離を生んでいるのでは

はないでしょうか。

キム 自分のなかにも暴力性があり、加害者になりうるということを考えなければいけないと思います。被害者についての話はずっとこの人間の話であり、文学作品とは結局、人間について話するために書かれるのではないのでしょうか。ひとりの人間の人生を詳しく知ろうと努力すれば、いっばうが加害者でいっばうが被害者という単純で暴力的な思考をしないようになるのではないかと思います。

小林 木当にその通りですね。

キム 日本にも韓国の「慰安婦」被害者の人生にずっと関心を持ってくださっている方がいますし、彼らの活動が被害者の人権を回復する力になったとも聞きました。ジャーナリストの川田文子さんは「赤瓦の家」朝鮮から来た従軍慰安婦(1987)という本で、「慰安婦」被害者の妻奉奇さんから数十年にわたって聞き取りをした証言を記録されています。沖縄に住んでいた妻さ

んは、韓国で初めて被害者として名乗り出した金学順さんよりも前に証言をされました。川田さんにお話を聞く機会があったのですが、妻さんは米軍の爆撃があったときに「慰安婦」だけでなく日本兵も四肢を失い、血を流して亡くなる凄惨な姿を目の当たりにしていました。証言を聞くために当時の防空壕に行った際、妻さんは亡くなった日本兵のために手を合わせて祈られたそうです。その姿を見て考えさせられたと川田文子さんはおっしゃっていました。

小林 ひとりの人として相手に接して折りを捧げられたことに高きを感じます。どうしても「加害者」や「被害者」をひとりで人間としてひとりの人生を深く見ることができれば、より建設的な対話ができる日が来るのではないかと信じています。いまは日本国内でも戦争や「慰安婦」に対して表面的にしか話し合われていない気がしていて、一人ひとりの人生を知るためのやり方を探

ることが作家の役割だと考えています。

キム ひとりの人間の人生を取り戻すことと、復元することが大切で、証言をすることも復元の過程だと思います。小林さんの作業も、大きな意味ではお父さんの日記を復元する過程ではないでしょうか。

小林 失われてしまった過去の父や過去の歴史を取り戻すことはできない。けれど、歴史の記録をもとに物語を編んでいくことは、新しい何かを見つけてくれることだと思います。日本でもみんなに「ひとり」を読んでもらいたいですし、ほかの作品も翻訳されてたくさんの方に読んでもらえればと強く願っています。

Profile
Kim, Soyoung 1974年韓国蔚山(ウルサン)生まれ、97年に「父田田」の著書『文壇』で文学博士、98年に文学博士、新人賞を受賞。デビュー長編小説『白鷺』でラジウム賞、2015年『あなただけの神』で文学博士、2017年『あなただけの神』で文学博士、2013年に現代文学賞、大山文学賞を受賞。15年に『手紙』で文学賞を受賞。

ひとりの人間の人生を詳しく知ろうとすれば、いっばうが加害者でいっばうが被害者という単純で暴力的な思考をしないようになるのではないかと——キム・スム

小林エリカ × 最果タヒ



目黒にて。左が最果タヒ、右が小林エリカ 撮影=岩澤高雄

Cross Talk 2

観測者という まなざしに宿るもの

小説、マンガ、エッセイという本のかたちにとどまらず、ドローイングや映像、写真などでも作品を展開してきた小林エリカと現代に生きる私たちの思いや感情を鋭い言語感覚で表現し、近年は、映画や音楽との協働や展覧会などとおして、「詩」のあり方を更新してきた最果タヒ。ふたりの書き手のまなざしに映るもの、その視線がとらえるものとは。

作家の身体を貫く時間感覚

小林 タヒさんにお会いするのは今日が初めてなのですが、これまで作品を拜読してきて、親しみというか思い入れのようなものがあった。こうして同時代に生きていること、直接お話しできることが幸せです。

最果 ありがとうございます。エリカさんの作品を見ると、時間の流れに抗おうとするところが、本当の意味での、生きるということ、時間を進んでいくことなんじゃないかと思わされます。エリカさんの作品に触れると、時間というものについて考えずにはいられなくなります。今日はそのことがお話しできたら嬉しいです。

小林 対談前に送ってくださったテキストで「観測」という言葉でそれを表現していたのが、とても新鮮でした。

最果 物事に対する観測、というより、時間そのものに対する観測、であるかもしれま

せん。小説はとくにそうですが、長い時間の流れがあつて、一瞬を断片的にはなく、すべてを積み重ねていくように書くとき、そのまなざし自体にも、エリカさんは意志を持ってしていると感じるんです。物事を見つめるだけでなく、その奥に流れていく時間に対しても、つねに意識的なのではないかと。だからこそ、起きること、生きる人の命にある、一瞬や水滸が、鮮烈なものに見えてくる。

小林 そんなふうに物事の奥に流れる時間や感情に向き合う。時には残酷と言われるような感情も裁かず、見つめて書き記すというのは、タヒさんの作品を読んでいて私が感じることもあります。

最果 残酷な感情ひとつとっても、そこに至るまでの過程、その人が生まれ、愛されて育つてきて、どう生きているかという全体を見てみれば、ひるがえって残酷じゃないものになったりもしますよね。

小林 時代によって善も悪も変遷していく

し、良い人が極悪人になったり、ひとりの人生のなかでも変化したりもする。

最果 善いものと悪いものをわけた感覚って詩を書いてるときはとくに、私はあまり持っていないかもしれません。言うべきでないといわれる気持ちさえも、思ってしまったならその人の生きている過程、その一瞬です。それをなかつたものとしてしまうことは、怖いことだと思います。

小林 タヒさんの作品は、過去や現在や未来が同時に渦巻いていて、それが直感的に、感情や身体に入ってくるんです。

最果 昔から、どうでもいいようなことを急に思い出してワッとすることが多いんです。先生をママって呼んじゃったとか。昔の、小さな感情が急に蘇ってくる。多いので、時間軸が頭のなかにはちゃんとあつて思えないんです。もしかしたら頭のなかでぐちゃぐちゃなのかもしれません。

小林 入れ替わったり、記憶や感情も書き換えられたりしながらいくつも時間が同

一瞬を断片的にはなく、すべてを積み重ねていくように書くとき、そのまなざし自体にも、エリカさんは意志を持っている——最果

タビさんの詩は、複雑な感情が、単純な言葉にくくられないまま、
とらえられないものや見えないものがそのまま言葉にされている——小林

時にあって、それが厚みを持った「いま」になつていくという感じでしょうか。時間の流れが一定でない個人個人のおかげで混ざり合つてあるよね！となつたのは、ヴァージニア・ウルフの『ダロウエイ夫人』（1925）を読んだときでした。タビさんがご自身の言葉で綴る「百人一首」ではとくに、いまを生きている人たちが交差している、そこには千年前もふくめてたくさんさんの瞬間があると感じさせてくれます。

最果 エリカさんの作品のなかでも、時間軸の交差のようなものを強く感じます。人それぞれに時間軸があつて、それらに飛び乗つていくことで、小説を書かれているような、そんな印象があります。そこにさらに客観的な線を引くように、大きな事件や出来事が挟まれていく。このエリカさんの「出来事」に対する距離感も好きです。「忘れられない」（2013）には、様々な女性たちの、18歳だったときの写真と記憶を集めた作品があります。当時のことをどう語

るかで、その人の個性がそつと立ち上がる作品で、私はこの作品がすつと忘れられませんが、とくに印象的だったのが、戦争やテロが起きた頃に18歳を迎えた女性たち、必ずそこに触れるということ。でも決して彼女たちは、「戦時下の18歳」というだけの存在にはならない。彼女たちは自分の時間を手放すことはない。その強さには大きな意味があると思いました。

小林 大きな出来事に巻き込まれて時間が奪われるのは怖いけど、それでもなお手放せない何かがあるというのは希望だと思う。「光の子ども」で描いたのですが、科学者のリーゼ・マイトナーは「看護婦」として戦地に赴くんです。昨日までは生きるか死ぬかの戦争の真只中であつたとしても、ひとたび戦線が離れると音楽を演奏したりしている日常が存在する。それはすこく皮肉なことだけれど、タビさんがおっしゃるように、時間を手放さないという最後の誓いのような、希望のようなものなのかもしれ

ではないと思うんです。阪神・淡路大震災で被災したのですが、被災地から外に出ると、出勤しているサラリーマンがいて、衝撃を受けたのを覚えてます。避難生活が続いていても、ニュースからは震災の話が減っていくし、まるで自分たちだけが漂流してしまつたようだと感じていました。ただ、いっぽうで自分がこの震災のすべてを知っているか、というところも違うと思つて

いた。被災者ではあつたけれど、被災者と名乗ることに大人になるまで抵抗がありました。私よりつらい思いをした人はたくさんいて、多くの出来事に対して、それこそ、私は現地で「観測者」となるしかなかった。私には「私の被災」しかないことが、とても情けないと思つていたんです。でも、それは私が私の人生を生きていることにもつながつていくと最近では思います。

小林 私自身は被災の経験もなく、戦争の経験もない。だから、私にはわかりえないことのほうが多いのではないかと思つています。戦争中と戦後少年だった父が記した日記を読んで、私はこんなにもすつと一緒にすごした、こんなにも親しい自分の父のことさえ、何も知らないし、わかりえない

んだと心底打ちのめされました。けれどそれでも、わかりえないからこそ、耳をすませたい。そう考えるようになりました。

こぼれ落ちた声に耳をすませる

小林 「恋人たちはせーので光る」でも強く感じたのですが、私がタビさんの詩に心が震えるのは、書かれた言葉の向こう側に、言葉にならないなつかさたり、言葉にできなかったりするような広大なものがあるからかもしれない。それが読んで自分の心の奥底にしまつてあるものたちまでを写してくれるんじゃないか、と思つたんです。複雑な感情が、単純な言葉にくくられないまま、とらえられないものや見えないものがそのまま言葉にされている。だからわからないながらもにうち震えています。

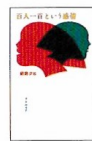
最果 見えないものやとらえられないものに対して、それを裁きたくない、壊したくないという感覚はすつとあると思います。俯瞰的にすべてを知るといふことが本当にできるのだろうか、とは思つた。大きな出来事についてだつて、人それぞれに、何年も経たなければ話せないこと、死んだ後でないと

ません。

最果 巨大な出来事を前にすると、どうしても、「観測者」としてしか自分が存在できない、と思うことはあります。でもそれは、決して「無力である」ということとイコール



最果タビ
『百人一首という感情』
（リトルモア、2018）



小林エリカ
『光の子ども 3』
（リトルモア、2019）

百人一首に向き合うことで「書いたかったこと」を語った1冊。「万葉集」に始まり鎌倉時代まで、いくつもの感情が、時間を超え、新しい言葉をまどって詠み手から読み手へと手渡される。



小林エリカ
『アンネの日記』
（集英社、2019）

2020年の東京。夏の暑さのなかで人々はオリンピックを、聖火を、光を待ちわびている。「放射能」の歴史のその先に待ち受ける近未来を舞台に「目に見えざるもの」の怒りが動き出す長編小説。

見えない真実、その瞬間でないと忘れてしまふことがある。「わかる」つて言えるときなんて来ないのではないかと思つています。だからこそ、エリカさんのいう「耳をすませる」という姿勢はとても自然で、誠実なものに感じます。

小林 幼い頃に「アンネの日記」を読んで「私の望みは、死んでからもなお生きつづけること！」という言葉に希望を抱いたんで

人それぞれに、何年も経たなければ話せないこと、死んだ後でないこと、見えない真実、その瞬間でないと忘れてしまうことがある——最果

す。ただ大人になって思うのは、人間の生って名を残した人の、さらにその一部が書き残されているだけにすぎないけれど、同じ時代に生きた、何も書かれなかった人の人生、その人が大切だと思っていた瞬間も無数にあるはず。そんな消えていってしまふ一瞬、日常の積み重ねは尊いもので、その痕跡を拾い集めていくことで、そこに人間が生きていたことを書きたい。そしてそれを、未来の誰かが見つけてくれたらいいなという気持ちも持っています。

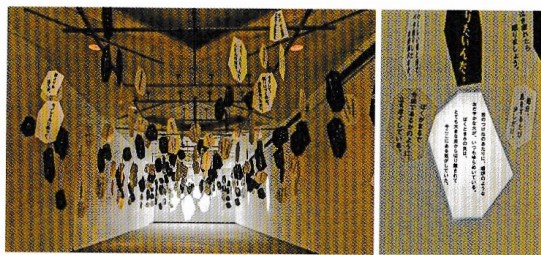
最果 エリカさんが歴史に向き合い、遡るようになったのはいつからですか？

小林 きっかけは、サラエボ包囲を報じる映像で、自分と同じスニーカーを履いている子供が逃げているのに驚いたこと。同じ時代に生きている子供が戦下にいる。あの子と私のいる場所は逆でもおかしくないということが怖かったし、自分がこの時代のこの場所でこんなふうにいるのはなぜなの？と考えるようになりました。

最果 自分がここにいることが、じつは不確かなことなんじゃないかって思い始める瞬間ってありますよね。それはもしかしたら、世界と自分という対比を生々しく意識し始める瞬間なのかもしれないです。

小林 人類が開発されるというのは昔もいまもあって、光を求める気持ちが積み重なって文明というものがあつたのかもしれない、最近実感しています。光がもつと欲しい、もつと安心したい、という人間の気持ちが、街をかたちづくり、核や原子力を生んで、いまがある。そこには悪い悪いでは測れない何かがあると感ずるし、その善悪からこぼれ落ちてしまうことにこそ興味があります。

最果 「光の子」と「マダム・キュリー」と朝食を(2014)を読むと、放射能というものが中心に据えられてはいるけれど、主題は、人間が生きているということ、人類の歴史そのものだと思います。科学の進歩は、人類が時間を進もうとする意思そのものとい



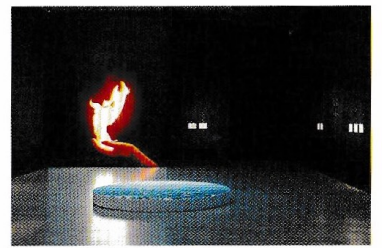
横浜美術館での最果タビ「水になる空」の展示風景。水点下の水は、壁になる直前の、さなきの中は、詩になる直前の、横浜美術館は。(2019) 展示風景 撮影=山城功也

たい！という気持ちがあふれてインスタレーションというかたちをとるようになりました。タビさんも今年、横浜美術館で展示をされましたね。

最果 美術館から依頼があつて、言葉の展示ってなんだろうと悩みました。人がその場に立つ必然性が必要だと思いました。そこで、モビールが動いて、言葉が動いて、そこにいる人が見ることで完成する詩をつくらうと考えたんです。すでに出来上がっている詩というよりも、詩が詩になる直前のふわっとした、流動的な場に入っていくような。

小林 「水になる直前の、水点下の水は、壁になる直前の、さなきの中は、詩になる直前の、横浜美術館は。」というタイトルの通りですね。

最果 私はずつと、街のなかに詩がある、という状況をつくりたいと考えていて……。2017年のルミネのクリスマスキャンペーンでは、それを実践できて嬉しかった



「話しているのは誰？」現代美術に潜む文字展(国立新美術館、東京、2019)より小林エリカ作品の展示風景。手前は(U234とU235 キールにて)(2019)、奥は(わたしの手のプロメテウスの火)(2019) Photo by Shu Nakagawa

うところがあつて、それを軸にして、人の歴史を描くことは必然に思いますし、だからこそ描かれる人が生々しく感じられます。

紙を離れ、空間のなかで言葉を感じる

小林 私は本が大好きなんです。そうするうちに、紙の上だけではなくもつといるような場所や状況でも本や言葉を読んでもら

です。人は街を歩く間、無意識にいろんな言葉とすれ違っています。文字も声も。色や音も混ざり合っている。いろんなものを五感で体感しながら歩いているときって、自分じゃなく街にポイントが合っている感じがします。そういうときに詩と出会ったら、詩の曖昧さ、透明な部分に、自然と溶け込んでいくことができるのかもしれない。

小林 今年参加した「話しているのは誰？」現代美術に潜む文字展でも、美術館に来た人たちが、作品を見るだけでなく、歩きまわりながら自分の身体のなかに本を記して持ち帰ってくれたら嬉しいと思いました。今日いただいたたくさんの方々の言葉、胸に刻みま

す。ありがとうございます。

Profile
 まいはてむひ 詩人・小説家、1986年生まれ。2010年よりインターネット上で詩作を始める。08年詩集「フットモニング」(2007)で中学中賞受賞。15年詩集「死んでしるべきはくらくら」で現代詩花賞受賞。17年詩集「小島は、いまも最高潮の黄色だ」(2016)が現代化。小林エリカ展(2019)より「わたしの手」(2019)の百一人一話(2019)にては、百を、詩の形として出した。

光がもつと欲しい、もつと安心したい、という人間の気持ちだが、街をかたちづくり、核や原子力を生んで、いまがある——小林

「目に見えないものたちを探して 小林エリカ」

『美術手帖』美術出版社

2019年12月号 (vol.71, no.1079) 、 pp. 134-157